

# たまのよこやま

大地の力  
こぼれまわっている!!

# ぶらり旧石器さんぽ Vol. 1

## 源流の遺跡 小平市鈴木遺跡

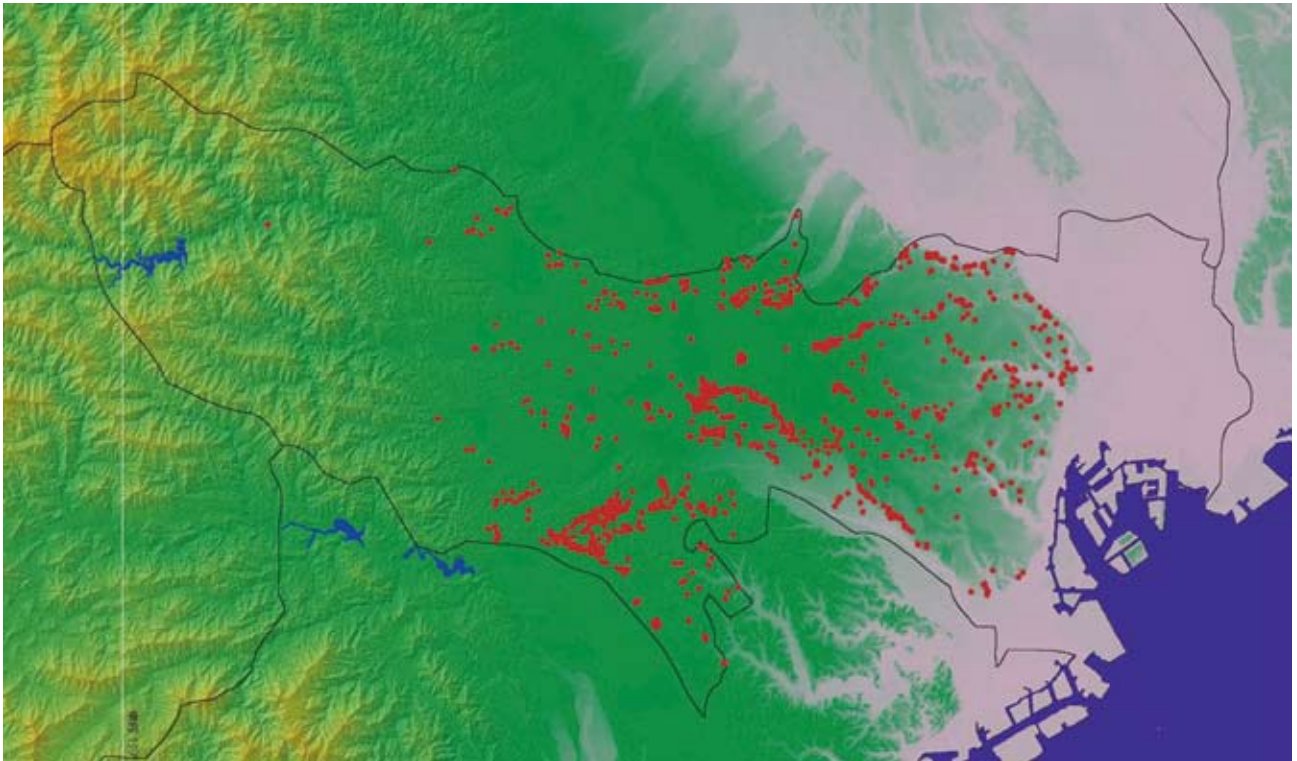


図1 東京の旧石器時代遺跡（日本旧石器学会 2010『日本の旧石器時代遺跡』より）

大地には、人々の生活の記録が刻まれています。私たちが暮らす大地の地下約 1 mには、古代の人々の暮らしの「足跡」が残されています。その「足跡」は、私たちがあまり気にすることのない何気ない土地の起伏や坂、川にも現れています。

「ぶらきゅう」シリーズでは、東京都内の旧石器時代の遺跡を訪ね、旧石器時代人がどのような場所に暮らしたのか、それぞれの地形と景観の復元を通じて、紹介していきます。

旧石器時代とは、約 1 万 5 千年以上前の、人々が一カ所に留まることなく動き回って暮らしていた土器を発明する以前の時代です。自然の資源だけを頼りにして暮らしていました。

### 東京の遺跡

さて、東京都内には 650 カ所の旧石器時代の遺跡があります（図1）。狭い東京とはいえ、その遺跡分布には偏りがあります。地形区分図（図2）と比較するとわかりますが、武蔵野台地と多摩丘陵に集中し、山地にはごくわずかしかありません。また、低地では地中深くに埋もれている可能性もありますが、発見されたことは一度もありません。

さらに細かく見ると、遺跡が線状に並んでいるよ

うに見えます。これは、遺跡が台地や丘陵の中の小河川に沿って分布するからです。川の近くには起伏や坂があります。旧石器時代の人々は起伏や坂、



図2 東京の地形（石器文化研究会 2000『石器文化研究』8をもとに作成）  
東京の地形は、武蔵野台地、多摩丘陵、東京低地、関東山地からなる。低地と山地には遺跡はほとんどない。





図3 鈴木遺跡周辺の地形  
 (早稲田大学 1996『下戸塚遺跡の調査 第1部』をもとに作成)  
 武蔵野台地内では概ね東西方向に川が流れている。遺跡は川の両岸にあることが多い。

川を好んで暮らしていたのです。

### 鈴木遺跡

東京都のほぼ真ん中にある小平市は、武蔵野台地上の、おおむね平坦な地形をしています。川がなくて平坦な場所には遺跡は少ないので小平市内には遺跡は少ないのですが、その中のひとつ鈴木遺跡は、石神井川がつくり出した東西方向に延びる幅約250 m、深さ5 mの谷の突き当たりの、谷を取り囲んだ平坦な台地上にある、弧状をした遺跡です(写真)。

実はこの鈴木遺跡、東京都内で最大、関東地方でも一、二を争う大きさの遺跡です。遺跡が大規模である理由は、そこが川の源流だからです(図3)。おそらく谷奥には湧水があったと考えられます。その水を求めて小動物が集まり植物が群生し、そして人々は水と動植物を求め、その谷上を見晴らしのきく場所を選んで、繰り返し居住地を営んだので、大規模な遺跡が形づくられたものと考えられます。



小平市鈴木資料館  
<http://www.city.kodaira.tokyo.jp/kurashi/001/001374.html>  
 開館日 毎週日・水・土曜日、祝休日(年末年始は休み)  
 時間 午前10時から午後4時まで

現在の鈴木遺跡の周辺には住宅や小学校が建ち、石神井川は約1 km 下流からはじまり、近くにはありません。現状からは、往時の景観を想像することもできませんが、何気ない地形の起伏にこそ旧石器時代人の歴史が埋もれているのです。(伊藤)



鈴木遺跡の発掘風景(昭和50年撮影)  
 (鈴木遺跡刊行会1980『鈴木遺跡Ⅲ』より)  
 茶色の地山が遺跡発掘範囲。住宅地が、石神井川谷頭に相当する。



鈴木遺跡近景(平成24年撮影)  
 遺跡のある台地上から、谷を望む。約5 mの高低差がある。



小平市教育委員会『鈴木遺跡たんけんマップ』より



コナラ

分類：ブナ科コナラ属生態：

北海道～九州

特徴：落葉高木。雌雄同株。

開花 4月下旬～5月

# 小櫛

(ホウソ)

遺跡庭園「縄文の村」では、縄文時代にも生えていた50種類以上の樹木のほか、多くの野草に出会うことができます。これらの植物と縄文人とのかかわりについて、ご紹介していきたいと思います。

ドングリと一口に言っても日本には沢山の種類がありますが、今回はその中でも皆さんが最も身近に見かけるドングリの木、コナラについてお話します。

まず、コナラの実についてです。縄文人の主食はドングリなどの堅果類であったらと考えられていますが、ドングリの多くにはアクが含まれています。前々回に紹介したトチほどではありませんが、コナラにも渋味となるタンニンが多く含まれていて、食用とするにはアク抜きをする必要があります。

ドングリのアク抜きは民俗事例に倣って多くの実験例がありますが、コナラの場合は長時間の水さらしと煮沸が必要になるようです。大変な手間がかかりますが、稲作に適していなかった東北地方の山間部などでは大正時代ごろまで重要な食料でした。

またコナラは実だけではなく、材も重要な資源の一つでした。現在もコナラ材は家具や調度品の他、シイタケ栽培の原木としても重用されています。

特に江戸時代の多摩は、一大消費地である江戸で使用する、大量の炭を供給する重要な地域で、各所で炭焼きが行われていました。当然ながら、大量の炭生産を無計画に行くと森林は禿山になってしまいます。継続的に薪炭生産を行うために行われていたのが、萌芽更新という森林の再生産技法です。



コナラの実（ドングリ）

これは伐採後の親株から出芽する若木を成長させ、手頃な大きさになったら再び伐採、そしてまた芽を出させ…と繰り返すものです。コナラは生育が早いので、周囲に自然とコナラの林が形成されます。明治時代の作家、国木田独歩が著書の「武蔵野」で、当時の武蔵野の風景の特色として、櫛林について触れていますが、これは昔から続く薪炭生産の末に生まれた風景なのでしょう。



コナラの雄花の花序

コナラの花は4月の終わり頃から咲き始めます。雄花の花序が垂れ下がり、木が浅黄色に染まるのは、本格的な春の訪れを感じさせてくれますが、この花序、実は意外な利用法があるのです。

落ちた花序を乾燥させてまとめると、フワフワのかたまりになります。そしてこれが火起こしの火口として抜群なのです。

麻の繊維のように急激に燃え上がらず、ゼンマイの綿やガマの穂ほど大量に集めるのに苦労しないので、埋文センターでの火起こし体験ではこれを使っています。

ゴールデンウィーク前後の頃に多摩ニュータウン周辺でコナラの花を沢山集めている人達がいたら、埋文センターの職員かもしれませんね。（武内）



# 大江戸 掘りもの帖 ～ 1 ～

以前、本誌に連載し、江戸の町の姿を紹介するコーナーとして、皆さまにご好評をいただいていたこのシリーズ。「続 大江戸掘りもの帖」として新たにスタートします。ご期待ください。

今回は武蔵岡部藩安部家の上屋敷の発掘調査とそれに因んだ遺物を紹介します。

江戸時代、武蔵岡部藩安部家の上屋敷は現在の参議院会館の付近にありました。岡部藩は武蔵国榛沢郡岡部（現、埼玉県深谷市）に陣屋を構えた小藩で、天正18年（1590）、徳川家康の関東入国に伴い、安部信勝が武蔵国榛沢郡内および下野国梁田郡内に5,250石を与えられたのがその始まりです。安部家の祖先は信濃の名族諏訪氏あるいは滋野氏の流れを汲むとされ、家紋に「丸に梶の葉」（諏訪明神の神紋であり、諏訪氏の家紋でもあります）、「六連銭」（滋野氏の家紋）を使用していることから、いずれの氏とも何らかの関わりがあったことが推察されます。

名字として安部を名のるのは元眞（?～1587）の時、彼が戦国大名今川義元および氏眞に属し、駿河の安部郡を所領としていた事に因みます。今川氏が衰退した後は甲斐武田氏からの服属の要請を拒否し、徳川家康に帰属しますが、この選択が近世大名としての安部家の発展につながりました。近代日本の財界をリードした渋沢栄一は岡部藩の豪農の出身です。安部家上屋敷は永田町の高台から西側の谷部にかけて広がっていましたが、発掘調査は谷部の斜面を中心に実施されました（写真1）。調査の結果、谷部を盛土して平場を造り、屋敷地としていたことが確認され、屋敷内の施設として、礎石建物、通路、木樋（上水道）、井戸、排水溝、地下室、土坑（ゴミ穴）、桶埋設（トイレ等）、土器埋設（エナ皿）、甕埋設などの遺構が発見されました。また、陶磁器・

土器、瓦、石製品、石塔、骨角製品、ガラス製品、金属製品、漆器・木製品、銭貨など遺物も多数出土しました。これらの多くは「丸に梶の葉」文様が施された鬼瓦（写真2）に見られるように、岡部藩上屋敷内で使用されたものと考えられます。

写真3の肥前産染付磁器は破片で出土しましたが、復元すると長軸約31cm、器高2.3cmの平底の楕円形の皿になります。断片的ではありますが、内面には染付により袈裟襷紋と宝尽くし紋が、さらに白抜きの部分に文字が書かれています。文字の中に「白髪三千」が読み取れ、このことからこれらの文字は中国盛唐時代の詩人李白による「秋浦の歌」とされる漢詩であることが解りました。全文を復元すると「白髪三千丈 縁愁似個長 不知明鏡裏 何處得秋霜」となり、愁いにより、白髪が三千丈になるほど長くなってしまったと嘆息の気持ちを表したものとされます。三千丈とは約9kmの長さで、あまりにも大げさな表現であることから、心に憂いや心配事が積もることの例えの他、誇大表現の例えとして使われることもあるようです。この皿は桶が埋設された遺構からの出土資料で、他に高品質な製品が比較的多く含まれていることから、屋敷内においても高貴な身分の人に所持されていたと考えられます。



2 丸に梶の葉紋の鬼瓦

（内野）



1 調査区（一部）近景



3 肥前産染付磁器皿

# 収蔵庫から

## 有舌尖頭器 その3

有舌尖頭器について、今回で3回目となりましたが、前回までは有舌尖頭器がどのようなもので、その使われ方や形、大きさの違いについてもお話してきました。そして、小さいものも大きいものと同様のものとして考えても良いのか、という疑問もお話してきました。今回は、やや違った視点から有舌尖頭器をみてみようと思います。

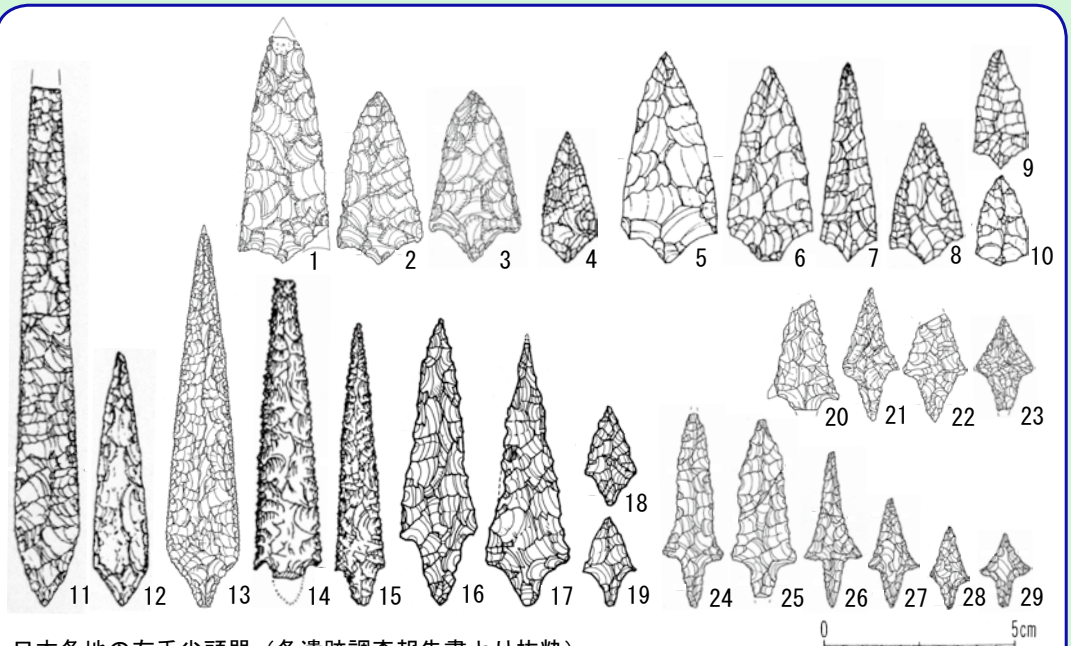
近年、発掘調査件数の増加によって草創期の遺跡から石鏃（矢じり）が発見される事例が、各地から報告されています。しかしながら、それらを見ると様々な形をしており、なかには縄文時代早期前半にみられる撚糸文土器や押型文土器と、さらにはその後の早期後半にみられる条痕文土器と一緒に出土する、「鋏形鏃」や「長脚鏃」と呼ばれる形態的にも特徴のある石鏃がみられるのです。これには、まだまだ細かな部分にまで及ぶ検証が必要だろうと思うのですが、未だに十分な検証がなされないまま、研究者の間で次第に定説化しつつあることに、やや危惧を感じています。

もし草創期に、どのような形だとしても、石鏃が存在していたことが確実視されるならば、当然、弓が存在していたことになり、今まで弓が発明されたと考えられていた早期から草創期へ、数千年も遡った（早くなった）ことを示しているのです。さらに、このことは有舌尖頭器が何故、草創期のみ存在しその後の時期に継承されなかったのか、という問題にも大きな影響を与えていると思われるます。

下図をご覧くださいと思います。不鮮明な図で申し訳ありません。これは北海道を除く日本各地より発掘調査によって発見された有舌尖頭器の代表的なもので（ごく一部ですが）、それぞれの報告書からの実測図を集めたものです。1/2（50%）に縮尺してありますが、いくつかあるタイプの中でも大きいものと小さいものに分けられる事は前回お話したとおりです。この中で11が一番大きく（欠損品ですが）、推定の長さは23cmほど、一番小さいものは29で長さは2cmほどになります。縮尺の図ではそんなに感じないのですが、これを実物大にしてみると、大きいものと小さいものとを本当に同じ考え方で扱ってよいのか、ということを実感に近い感覚で受け取る事ができるのです。

この大きさや形の違いは、一般的には時間的な変化（形態的変遷）と捉えることが出来ます。これは「人間が作り出す道具は、時間経過（進化）に従ってその大きさや形などが変化していく」という、型式学的な考え方に基づいているのです。

次回はこのような考え方を踏まえて、石鏃の同時存在も含め、有舌尖頭器をどのように考えたらよいのかを探ってみたいと思います。（並木）



日本各地の有舌尖頭器（各遺跡調査報告書より抜粋）  
 1～3:愛媛県上黒岩 4:愛知県酒吞ジュリンナ 5～9:長野県柳又B地点 10:同柳又A地点  
 11-12:福井県鳴鹿山鹿 13:群馬県吹屋 14-15:新潟県小瀬ヶ沢 16～19:神奈川県花見山  
 20-21:神奈川県万福寺遺跡群No. 2 遺跡 22-23:同No. 1 遺跡 24～29:神奈川県三ノ宮・下谷戸



# 縄文人の食事

当たり前の話ですが、人間は何かを食べなければ生きていけません。ということは、今も昔も「食べる」ということ自体、現代人であろうと縄文人であろうと、変わらない行為だったはずで、つまり「食べる」ということは人間が生きていく上で必要不可欠な本能なのです。

現在では、お腹が空いたらあちこちにあるコンビニやファミレス、ラーメン屋などで空腹を満たすことができます。スーパーでも食料品を買うことができます。しかし縄文時代にはそのような場所はありません。まさに自給自足の生活でした。食べ物は自然の中にあるものだけです。

今現在、私たちが自給自足の生活をしようと思ったら、それはとても大変な苦勞の連続です。水道、ガス、電気がなかった時代に縄文人たちは、毎日自然から食べ物を得ていたのです。

では、具体的に縄文人は何を食べていたのか？ということですが、それは食べかすが残りやすい貝塚や、低湿地遺跡の発掘調査の成果から徐々に分かっています。

海辺に生活した縄文人は、食料とした海産物（貝殻や魚の骨）などが捨てられてできた貝塚を遺しましたが、タイマグリ、ハマグリやアサリなど、今でも馴染みの魚介類を中心とした海の幸をふんだんに使った食事をしていました。

また、丘陵などの内陸部に暮らしていた縄文人は、ドングリやクルミなどの木の実やコゴミといった山菜、シカやイノシシ、クマなどの肉を食べていたと考えられています。

当センターでは、そのような調査によって少しずつ分かってきた、縄文人が食べていたと考えられるメニューを再現。毎年秋に実施している「縄文食体験」で、参加された方々に「縄文人の食事」の素朴さや、単純な調理方法でも素材そのものが持っている味を出さることができる、という縄文人の知恵を、実際に食べることで体感していただいています。参加者の縄文食への関心や興味が高いこともあって、とても人気のあるイベントです。

「縄文食体験」の人気や関心だけではなく、世間一般でも最近、「食」についての興味や関心は高まっ

## 平成24年度 年間展示解説シリーズ その1

ているようで、「食育<sup>しよくいく</sup>」という言葉で「食べること」の大切さが取り上げられていたり、はたまた最近では「日本食を世界遺産に！」という声も上がっているほど、「食」というものがなにかと注目されています。日本食の最大の特徴は、「素材そのものが持つ味を生かす、引き出すことだ」といわれています。これは縄文食体験で提供している、素朴で素材の味を最大限に生かしたメニューと共通する部分があるかと思います。もしかしたら、日本食を生み育<sup>はぐく</sup>んできた日本人の味覚の原点に縄文食があり、それが継承<sup>けいしょう</sup>されてきたものかもしれません。

そこで、今回改めて、縄文時代の「食」について考えてみよう！ということで、当センターの2012年度年間展示では「縄文人の食事」というタイトルで、縄文時代の食生活をご紹介します。

展示では、縄文人たちの「食べる事」に関連した調理の痕跡<sup>こんせき</sup>や食材、ひと工夫した食べ物など、「縄文人の食事」を現在の食事と比較しながらお見せしたいと考えております。

「縄文人の食事」を通して、天然素材を使った素朴な食事の素晴らしさと、食の原点についてお伝えできれば幸いです。

ご期待ください！

(鈴木)



## 平成 24 年度の行事ご案内

- 4月 22日(日)「縄文の村」自然観察会①
- 5月 3・4日(木(祝)・金(祝)) 縄文ワクワク体験祭り  
19・20日(土・日) 縄文土器作り教室①製作(2日間の連続参加)
- 6月 9日(土) 縄文土器作り教室①野焼き  
23日(土) 縄文アクセサリー作り教室①(午前の部)  
30日(土) 古代糸作り教室①
- 7月 7日(土) 第1回文化財講演会(演題・講師未定)  
21日(土) 親子縄文土器作り教室②製作  
22日(日) 親子縄文土器作り教室③製作  
25日(水) 親子古代糸作り教室②  
26日(木) 古代の布作り教室①②(午前の部、午後の部)  
28日(土) トンボ玉作り教室①
- 8月 2日(木) 親子縄文アクセサリー作り教室②③(午前の部、午後の部)  
4日(土) 親子火おこし体験①②(午前の部、午後の部)  
11日(土) 親子縄文アクセサリー作り教室④⑤(午前の部、午後の部)  
18日(土) トンボ玉作り教室②  
25日(土) 親子縄文土器作り教室②③野焼き
- 9月 15・16日(土・日) 縄文土器作り教室④製作(2日間の連続参加)  
22日(土(祝)) 第2回文化財講演会(演題・講師未定)  
29日(土) 考古学実習「実測してみよう」
- 10月 13日(土) 縄文土器作り教室④野焼き  
21日(日)「縄文の村」自然観察会②  
27日(土) 縄文アクセサリー作り教室⑥(午前の部)
- 11月 3日(土(祝)) 考古学実習「縄文食体験」①  
4日(日) 考古学実習「縄文食体験」②  
10日(土) 第3回文化財講演会(演題・講師未定)  
17日(土) 考古学実習「撮影会」  
23日(金(祝)) 親子古代の布作り教室③(午前の部)
- 12月 1日(土) トンボ玉作り教室③  
29日(土)～1月3日(木) 年末・年始休館
- 1月 19日(土) トンボ玉作り教室④  
26日(土) 縄文アクセサリー作り教室⑦(午前の部)  
26日(土) 映像上映会(午後の部)
- 2月 6日(水) 多摩市共催文化財講演会①  
13日(水) 多摩市共催文化財講演会②  
20日(水) 多摩市共催文化財講演会③  
23日(土) 縄文アクセサリー作り教室⑧(午前の部)
- 3月 11日(月)～15日(金) 展示替え 館内休館  
16日(土) 展示説明会 午前10:00～ 午後13:00～ 各回1時間程度  
23日(土) 発掘調査発表会  
30日(土) 親子縄文アクセサリー作り教室⑨(午前の部)

### 今号の表紙

頬に感じる風にはまだ冷たさが少し残っていますが。縄文の村に注がれる陽射しの確かな暖かさを感じて、ゼンマイが目を覚ました。まわりにはワラビやコゴミも頭をもたげて、さあ、背くらべのはじまりです。

「たまのよこやま」の由来 万葉集巻二十之四四一七の防人となった夫の旅立ちに備えて、山野で馬に草を食べさせていたところ、馬は逃げてしまった。やむなく徒歩で多摩丘陵を越えることになってしまった夫を見送る妻の嘆きを詠った「赤駒を山野に放し 捕りかにて 多摩の横山 徒歩ゆか遣らむ」(宇治部黒女) を由来としています。



たまのよこやま 88

2012年3月31日発行

東京都埋蔵文化財センター 〒206-0033 多摩市落合 1-14-2 TEL 042-373-5296 <http://www.tef.or.jp/maibun/>